り長時間に亙るのも希はしくなく、次に、之等の廣大な遺跡を急いで通つて、唯、最近の業蹟と、最近の研究との結果だけに注意を引くに止めねばならなくても、之は豫め宥恕されたいのである。

一

余は恰も二十五年をおいて、再度アンコールを訪ねた。其第一次は千九百年で、第二次は昨年(一九二五年)十二月の事である。斯くて一方には廢墟の物的保存の事業、他方には其科學的解釋の努力、之等が進歩した跡を十分考へて見る事が出來るが、自身は直接此の事業に關係しなかつたのであるから、忌憚なく、その進歩が著しいものであると云へる。

二十五年前でも、已に、ヅーダール・ド・ラグレ Doudart de Lagrée や、フランス・ガルニヱ Francis Garnier や、ドラポルト Delaporte や、デモニヱ Daymonier などの力で、其最も主要な建物は知られて居たのであり、主な梵語の銘文も、已に、ベルゲーニュ Bergaigne や、バルト Barth や、セナール Sénart 氏の手で、判讀譯出されて居たのである。——銘文は殆んど何れも梵語で書いてある。——然し